



室咲や一日五時間あらば足る
花冷やアンドロイドの不老不死
揚雲雀揚がるは浮世離れかな
雛納仕舞ひ切れざる歳月よ
春昼の闇の真中にウォール街
筏組まずよ一ひらの急ぎをり
蛙焼の走りてこの世抜けてゆく
燕の通り抜くるや伊根舟屋
春暁や麴麴屋の窯に炎の満つる
晩歳の見習ひ難き花吹雪
熊の肝は札代りとよ出熊獵
卒業子薔薇一本を波に置き
たつぷりと花を抱きて日の沈む
春休み兄弟栗鼠の見分け方
温めても孵らぬ夢や葱坊主

国見敏子
栗原利代子
福島米雄
宮地良彦
矢島惠
折井眞琴
根橋久子
幹自聲
長崎玲子
塚原白里
清水美智子
山崎妙子
長島環
福田紫枝子
岩間嘉一

*

喪の家や流水沖にとどまりる
日課なく暮らす苦しみシャボン玉
駅弁のこめつぶ頑固花あかり
途中までたましひだったしやばん玉
行く春や雨に粘りの出てきたる
命終を待ちくたびれて春眠す
磯焚火海の底より子守唄
かげろふや生まれずにゐる詩の欠片
主役まだ譲らぬ氣骨遅桜
厨房の貝が歩けり雛茶会
竜天に初めてルージュ引きし頃
鉄砲百合いくさは常に海より来
手習ひに佐久夜己乃波奈逢ひたかり
夜桜は妻を見るより艶めけり
蘆の芽や両手拡げて人体図

荒川美恵
中岡草人
市川敬子
鎌田文子
柿谷有史
岩井かりん
川村五子
瀬戸柚月
太田薫
角竹正至
金井むつ美
渡嘉敷皓駄
小伊藤美保子
岡部昭男
滝澤あや

岳俳句・拓くことば 六月

(442)

宮坂 静生

一日五時間―生存に必要な時間とは

室咲や一日五時間あらば足る 国見 敏子

起きて働く時間が一日どれだけあればよいか。人によって違うのは当然であるが、五時間で足りるとはひとつのあきらめ・諦観がある。もうそんなにがんばっても先は知れている。欲も少なくなった。終末を考え、ほどほどの人生をおくるにはこれくらいと見当をつけたものか。自足の句にしてはどこか決めつけられる押しのつよさを感じさせる句である。しかし、淡泊な句が量産されている俳句界への批判のような重みを感じさせる一句がほしいと私は思っている。掲句がそれ。

花冷やアンドロイドの不老不死 栗原利代子

アンドロイド（人造人間）がいよいよ俳句にも登場。「不老不死」とはすごいことになりました。それをさりと「花冷」で受けとめられた作者の世の進展(?)を軽くないすそぶりに感心した。人間はたかだか百年。人造人間はこれから頭脳も開発され、将棋名人級くらいの能力ではなく、お利口になれば、人間ははじめこの上ない。むずかしい仕事はみんな

アンドロイド君にやって貰って。本当は恐ろしいが、いまのところさてどうしたものか。巧みな作と思う。

雛納仕舞ひ切れざる歳月よ 宮地 良彦

お雛さまは毎年、時期に出されて飾られて、そして翌年まで納められる。それは、メリハリある、ときめきのいのちとでもいいたい。ところがわが人間の生き方は、一端舞台上に上ったならば出ずっぱり。筥の中で一休みとはいかない。長年、世の空気に曝されながら新鮮さを保つ生き方とはなるとたいへんなことか。(つらつら年月の移り来し)(幻住庵記)と思うばかりだと省みる。雛の歳月のリズムとの対比が秀逸。

春屋の闇の真中にウォール街 矢島 恵

ニューヨークの世界経済の中心地ウォール街。その置かれているのが絶好の季節の最高の時間帯でありながら、実はそれこそ「闇の真中」だと、グサリ核心を突く。エラリー・クイーンのアステリーの舞台があばかれるような一瞬のときめきが一句にはあろう。しばしば渡米される作者の囁目吟か。

筏組まずよ一ひらの急ぎをり 折井 眞琴

燕の通り抜くるや伊根舟屋 幹 自聲

奥丹後の伊根にある海に突き出た舟屋。舟の出入りの舟屋空間を巣づくり、子育ての燕が自在。地貌のゆたかな光景を的確に捉える力をつけつゝある作者。視野も広く、好奇心が旺盛なのがいい。着眼、着想につねに迫力がある。

春暁や麵麴屋の窯に炎の満つる 長崎 玲子

場景を過不足なく捉える技の持主としては「岳」一番の作者。決して駄句を作らない。ときにまとまりの巧さが読み手に勝手な想像をゆるさないことになる。しかし、掲句のパン屋の「春暁」、その工房風景を「炎の満つる」までゆきとどいた描出をした点はさすがに老練。しっかりした佳句と思う。

晩歳の見習ひ難き花吹雪 塚原 白里

「晩歳」は晩年。人生も晩年になって花吹雪を浴びるようなことは見習い難い。むずかしい。なかなか晩年の一日一日は大変だという句であるが、連想が花吹雪という最高の光景に及んだところに若さがある。ひとはた揚げようという意欲を感じ推奨した次第。

熊の肝は札代りとよ出熊狸 清水美智子

春に穴から出る熊の肝が「札代り」といわれるほど貴重とは、マタギ伝来の知恵。それだけのことに違いはないが「出熊狸」の句例として珍重したい。鄙の都市化現象著しい現代

花筏など組まないで一片の花片が流れを急ぐ。わかりすぎるほど作者の生き方に引きつけた個性を詠った。が、あえていうとこれくらいはまだ個性といえるほどではない。「岳」

の中では個性的な独自の道を拓きつゝある作者であるが、大海に出ると、珍奇な「個性」がさまさま。その中で本物はなにかの真贋の見方がむずかしい。貴重な作り手である。

畦焼の走りてこの世抜けてゆく 根橋 久子

「この世抜けてゆく」がおもしろい。畦焼の焰が次々と燃え広がる早さは人知を超える。小走りくらいでは、追いつかない。焰にあやつられて真剣になる。尋常な日の中にこんな体験がある。私も二十代の日に畦焼の凄さを体験した。野火の類はまさに縄文の世をかいま見させる。

今月の秀句

揚雲雀揚がるは浮世離れかな 福島 米雄

現今のあわただしい世に、麦畑辺から天空へビイビイ鳴きながら上るとは、雲雀の「浮世離れ」もいところ。古来、雲雀の生存のスタイルは変らないが、人の世がチマチマ、コセコセあわただしくなった結果、雲雀がいかにも超然と生きているように見える。奈良の唐招提寺近くへ移住された作者にとり、案外雲雀への共感から詠まれた作ではないか。

拓くことば ⑬ 自句寸言(1)「縁のなき」

私の句に関しては『魚島木燦楼―宮坂静生俳句鑑賞』（窪田英治・花神社・二〇〇六年十一月刊）や『拝啓静生百句』（小林貴子・花神社・二〇一三年五月刊）などのほか、現在も「岳」誌上で誌友から健筆をふるってもらっている。ありがたいと思う。

私は自句自解というのが苦手で、今まで身を入れて書いたことがない。上記の鑑賞書を始め多くの方から書いてもらい感心し、到底自分ではこんなに書けないと尻込みをするばかりであった。ところが、人さまの俳句には毎月あれこれ鑑賞やら放言をさせてもらっている。その切り返しを自句にもと言われることがある。もっともなので、自句に関して一句一言くらいのことばを付けるのもわが俳句を読んでくださる方への参考になるかも知れないと、筆をとることにした。一句三百字くらいを目処に書きたい。句集上梓順に、作句に関し付言ある句をとりあげることにする。

縁のなき地に来て向日葵のみ美し 昭和29年

俳誌「龍膽」（第六十九号・昭和二十九年九月号）に初投句、主宰の藤岡筑邨先生の選評に「トルストイだったか『自然は初対面の人に最も美しい姿を見せる』といった。この向日葵がそうだ」と取り上げられた。ささや

かな俳句界デビューの作。私は松本の深志高等学校二年生。夏休みに松本から木曾の馬籠まで文学部の仲間四人と四泊五日の徒歩旅行をした。宿泊は無銭。奈良井は公民館、上松は寢覚の臨川寺、妻籠は小学校の宿直。馬籠は藤村記念館の案内所。馬籠では藤村の長男島崎楠雄さんに毛布を貸してもらい、お世話になった。掲句は馬籠での作。不意の訪問でありながらよくしていただいた。ところが句では向日葵を讃え、人情は無視。悪いことをしたと思うが、恵那山を背景に、背の高い向日葵が美しかった。句集『青胡桃』所収。

使ひの子冬休みの校庭通り過ぐ 昭和30年

「龍膽」（第七十一号・昭和三十年三月号）雑誌巻頭三位。同時作「足袋をつぐ母の背揺すり金せがむ」「子は太陽をべたべたと塗り春を待つ」など。わが句は初めから実体験に忠実ではなかった。母に金をせびることもなかった。太陽を塗る子が身辺にいたわけではない。これくらいが句に成り易いと、清貧な暮らしを想定してまとめた。しかし、戦後十年の暮らしは貧しかった。掲句はイメージに母校の源池小学校があった。私は学校が好きだった。特に小学校が好きで、その先生になりたかった。句集『青胡桃』所収。

にあって、山国人の伝来の暮らし詠などはほとんど見られなくなっている。若い俳人を中心に軽く暮らしのたこ壺俳句が目立つ中で、説明にも意外性がある掲句に注目した。

卒業子 薔薇一本を波に置き 山崎 妙子

海難事故に遇い卒業できなかった友人がいたのであろうか。東日本大震災関連詠の一句とみても、思いが深い。

たつぷりと花を抱きて日の沈む 長島 環

満開の花日和。その日没詠にして恋句風なところに作者のさりげない特徴が出た。こんなお日さまの気持はどんなであろうか。それにしても「日の沈む」終末があることへの思いは深い。人の世へも想像が拡がる句である。

春休み兄弟栗鼠の見分け方 福田紫枝子

山へ入っての学習の一ページ。どっちが兄で弟にはどんな特徴があるのか。専門のリーダーか父の伝授。一つ一つ知識がふえてゆく楽しさこそ幸せな人生のはじまり。「春休み」は学校の宿題を離れ、いちばん遠くまで自由になれるとき。

温めても孵らぬ夢や葱坊主 岩間 嘉一

「葱坊主」と置かれたことによって、大方の体験を経て、これからの半生はこれくらいとの諦観の思いに至っている主人公が見える。雛を孵化させる親鶏の思いを藉りて、ひよつとユーモラスな一句を作り上げたのはなかなか。

雪嶺集、前山集から次の句も書き留めた。

牛突き	の牛を日向へ春の灯台	有手 勉
あの頃は	鬱の少年猫の恋	水口 達彦
桜隠し	忘れぬやうに母に見す	米山 節子
願はくは	こべのやうに我が晩年	宮坂やよい
初蝶と	気付くに暫しかかりけり	小牧 七草
花びらの	幹をなぞりて落ちにけり	白井小夜子

流水の沖と喪の家―重い日常

喪の家や流水沖にとどまりゐ	荒川 美恵
---------------	-------

北国北海道の止まったまゝ動かない海景を捉え、読み手に問題を投げかける作。重い句には違いないが、生きる途上で出会う厳粛な、避け難い光景。生きることは辛い。しかし、この辛さを受けとめながら、その隙に光を見つける以外に生きる手立てはない。無言の存在感ある作。

駅弁のこめつぶ頑固花あかり 市川 敬子

花見どきに駅弁の弁当箱についた硬い米粒を「頑固」とみた。炊き立てとはいかない。時間が経った米粒であるが、平凡なところにもおかしみがある着眼の作。つねにひととは違った見方を失わない作者として注目している。意識的に、円満にならないところがなかなかいい。

途中までたましひだつたしやばん玉 鎌田 文子

しゃばん玉がたましいとは一つの明るい着想としてなるほどと思う。生きている結晶のような息を吹き込む。それがストローから離れた途端に、浮遊感が付き、ふらふらと空へ昇る。たましいはこんなじゃない？ と、その美しい軽さに現実離れを感じたものか。たましいにはどこか現実苦の痕跡がほしい気がする。

行く春や雨に粘りの出てきたる 柿谷 有史

夏近い晩春の雨粒に触感「粘り」を感じた。鋭い。夏の雨は硬質。春の温い柔らかな雨がかちんかちんとなる刹那の粘りとは、有史君ならではの捉え方に深さを感じた。

命終を待ちくたびれて春眠す 岩井かりん

〈今日がぎりぎりのところでしようね〉などと主治医に宣告され、縁者が集う。できることはしてあげたからと、皆不足の思いはない。〈ぎりぎり〉を待つが、意外に生命力ある病者。待つ方がついうとうと傍で浄土の夢などみて。病者が高齢であれば、「待ちくたびれて」がおかしい。元気な者が病者にあやつられているとでもいゝたい着想に、作者も苦笑いでもしたものだ。現代俳句の現代の一面面か。

磯焚火海の底より子守唄 川村 五子

五年経つとはいえ、東日本大震災の海の惨事が消えたわけではない。海士が「磯焚火」をし、暖をとっていると、海の

竜は空想上の神獣。「春分にして天に登り、秋分にして淵に潜む」（説文解字）という。仲春の頃をさす。折からはじめて赤い口紅を引いた頃をふと思った。ご本人は天にも昇る気がしたものか。男子にはどんな経験かと省みるが、女性ほどの冒険は男にはないものか。ルージュの響きがいい。

鉄砲百合いくさは常に海より来 渡嘉敷皓駄

沖縄在住の作者。今次大戦の遺骨収拾に生涯をささげるといふ遺族会のまとめ役も担う。何回もきくことばには違いなが、沖縄のいくさは仕掛けられいつも海より来る。この島人のなげきは重い。本土日本の者が本当に沖縄のことを思ったことがあったらどうか。百合の名がなんとも哀しい。

今月の秀句

日課なく暮らす苦しみシャボン玉 中岡 草人

毎日これといつてやることがなく日を暮らすのはつらい。こんな凄いことはいままで詠われなかったのではない。老年になると、私などもへやることがあっていいね」といわれる。忙しいのが華というべきか。シャボン玉からは軽く夢を湛えた人生の哀歎を感じさせられる。大阪の長老も八十七歳。草人さんの「岳」入会が私が「鷹」にいたとき。四十年近い誌友。視覚ご不自由を超えて、私には神さまと見える方だ。

底より子守唄が聞こえてきたという設定。志摩あたりの海であっても、海は世界に繋がっている。津波で海底に引かれた母子が子守唄をという想像はいまも生ま生ましい。海士であれば、海底にも通じ、特有な鋭敏さがあるものであろう。

かげろふや生まれずにゐる詩の欠片 瀬戸 柚月

俳句作りの内面の工房をいえば、まことにこの通り。生まれそうで生まれない。安産もあろうが歳月を経るほどどうもこちら難産が多いとは、産みの苦しみは女人も詩人も同じ。かげろふはことが生まれかかっている態。そこがいい。

主役まだ譲らぬ氣骨遅桜 太田 薫

どんな場面での主役か。老若、先輩後輩、姑嫁など、連想は広がる。私は昔から〈親はあっても子は育つ〉（親がなくてもではない。古い親があってもの意）を信条とし、親が元気でないと子がしっかりしないと思っている。これくらいでは主役は譲れないわ、との心意気がすばらしい。姥桜ならぬ遅桜のひそかな思いにも確かな手応えがある。

厨房の貝が歩けり雛茶会 角竹 正至

「雛茶会」のために用意した貝が厨房の板間などを歩く。おっとりした古式ゆかしい構えでの茶会か。ささやかな貝の描写によって全体のおうらかさが伝わる。飛騨高山の作者。

竜天に初めてルージュ引きし頃 金井むつ美

手習ひに佐久夜己乃波奈逢ひたかり 小伊藤美保子

手習いに「佐久夜己乃波奈」（木簡出土）を習わされた。平安の女房ではないが、筆を持ちこんな艶っぽい字数を書いていると平安人が乗り移り、恋人に無性に逢いたくなる。「この花」は「木の花」。梅のこと。また、桜。

夜桜は妻を見るより艶めけり 岡部 昭男

句中で夜桜と対比された奥方のなかなかの麗人ぶりが目にかかる。妻を讃えるにはかくの如く一句をものすべし。

蘆の芽や両手拡げて人体図 滝澤 あや

しばしば見かける人体図であるが、太古の天地開闢に登場する蘆の芽（あしかび）との取り合わせは照応が巧み。世の素型（もとのかたち）を提示した眼力に感心した。

岳集から次の句にも注目した。

ゆつくりと考ふる子よ春セーター 三輪 文代
曇天を揺すり揺すられ花イペー 池間ヨ子
鳥雲に藻屑火けぶる男鹿の浦 今野 晶子
不安なる黄昏色のつくしんぼ 塩川 昭子
たのしみは日の出の時刻夏隣 柳原 清泉
囀の金色堂を覆ひけり 夏目 重美
雉子鳴く都府楼跡や草の雨 宮原 桂子
盛り場にテロあり木瓜の花に刺 久保田義夫